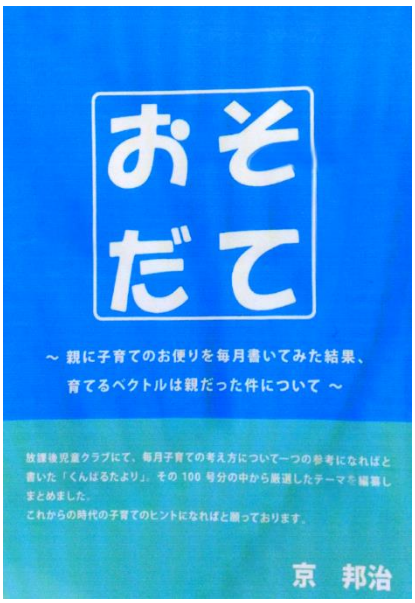
「ふるさと春日井学」研究フォーラム
Forum for Furusato Kasugai Studies
「ふるさと春日井」まちづくりへの応援メッセージ
『ふるさと意識なくして地域の活性化なし』

会報
NO. 92
2024.4.23 発行
編集責任者:河地　清
Kawachi-k@mb.ccnw.ne.jp

９２回「ふるさと春日井学」研究フォーラム

テーマ:『「おそだて」これからの教育・子育てを考える』

講師:京　邦治　氏(NPO 法人くんぱるハウス理事長)



著書『おそだて』

「子育て」の理論と実践をわかりやすく解説します。「子育て書籍『おそだて』の著者京　邦治氏が実践されている」に日々悩む若いお父さん、お母さん達へのヒントを提供します。子供のために何を重要視しますか？「子供が将来苦労をしないように」という一点が共通ではないでしょうか？時代は移ろい、考え方にも変化が見えてきているのが今の時代。13 年放課後児童クラブの中で子どもとご家庭と接してきた経験による一つの答えです。私が考える子どものために重要視することです。この答えを「くんぱる式」と称しております。きっと皆さんの中の選択肢の一つになってくれると信じております。「はじめに」より

『「おそだて」これからの教育・子育てを考える』と題して

京氏の持論である「子育て」は、「親育て」であることを解説していただきました。「親の意識、が重要である、

「親」という字は、立って見渡すと書く。親は、子供を、付かず離れず見守ることが大切な行動である「おそだて」とは、子育ての元を育てることであり、それは、縄文時代にその精神はあるという。21 世紀は、解のない人間社会となり、多様性を受け入れ人間らしさをより求められる社会となって行くことを考えれば、AI に判断されるのではなく、人間性で判断できる人間が、中心の社会でなければならない。人を想い、人を憂い、理屈ではなく感じ取れる人を育てなければなりません。正しい日本語思いあう言葉、助け合う言葉、生活様式の意味を知る、やり方を知る体験を伝えることが大切です。そこに、愛のある言葉と、活動が必要です。それを、「情活」と定義付けて実践しています。」『人間万事人を憂う』を信条として掲げる京氏の熱い教育論を承

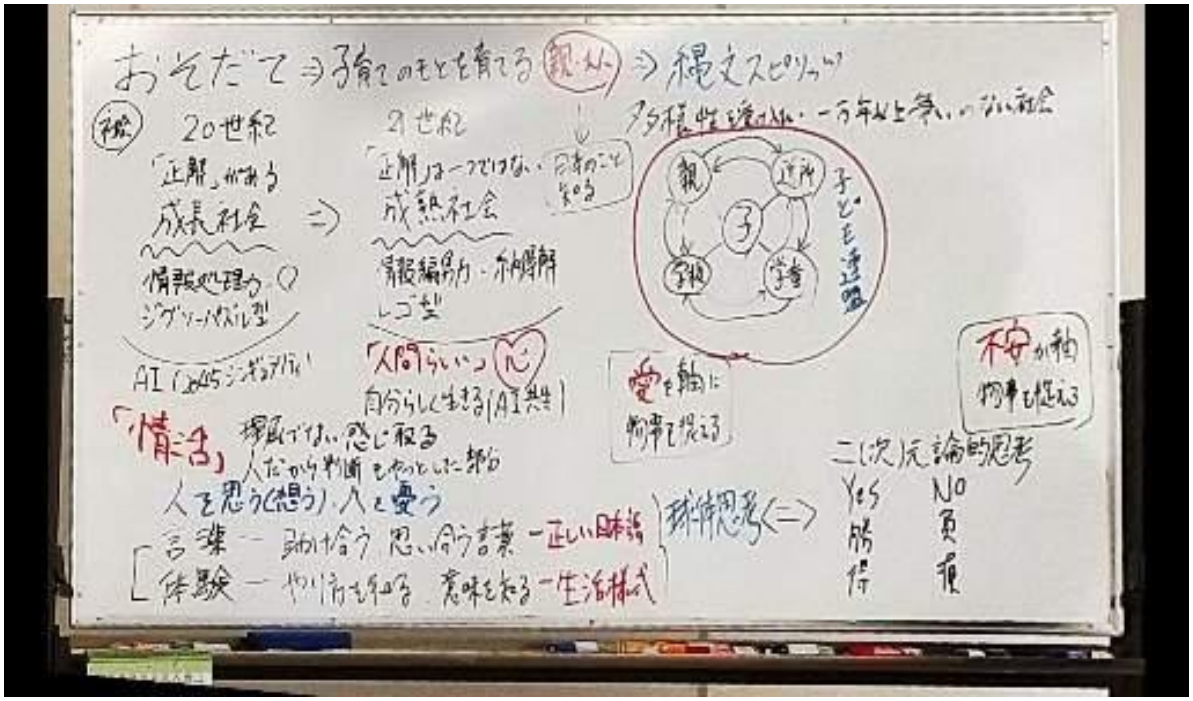
りました。参加者は、取材記者含め 15 人でした。

《発表要旨》京　邦治氏の寄稿原稿をもとに編集しました。

講演する　京　邦治　氏

「おそだて」から、これからの教育・子育てを考えるとは、親育て（おやそだて）を略したもの。子育ての意識を今、変えていかなければならない時代に入ってきた中で表面的な部分を変えたところで本質を変えなければ元の木阿弥になってしまう。日本の元を知る、宗教の元を知るという声がちらほらと聞こえる中で子育ての元を知る、正すということはつまり、親や大人の子育て、教育観をアップデートしないといけません。果ては先祖の記憶やデータというところの上書きにも繋がるのかもしれませんが。子育てを語るために、するために我々親、大人の意識維新を求められているのは、「今」であると考えます。

２１世紀は成熟した社会の中で「答えは一つではない」「答えなき問い」に自分なりに情報を編集結合して答えを出すことが求められています。



板書事項

学校教育も「生きる力を活かす」を目標に学習指導要領を作り、２０２０年から始まっています。

AI がメキメキと進化する中で AI ができる部分は既に人間に代わり取り行ってもらう社

会に変化してきました。これからはもっとその流れが加速するであろうことが予測される中、人間は何を学び、何を大切にして生きていくのが望ましいか、そして先に生きる大人たちが何を教え伝え、育てるがいいかを追求しないといけません。
キーワードは「人間らしさ」。AI を切り離すことは難しく「共生」していくことが流れの中で人間の役割は０と１００の間の「モヤっとした部分」「その場の流れをリアルタイムで感じ取り言葉にするような部分」言葉では言い表せない「心」をより磨き上げることが必要となる、それしか現状人が人として生きる道はないのでは？と考えられます。

そのために子どもに必要な活動は「情活」という心＝感情を育む活動です。
子どもたちに情活するために大人が大事にするのは２点。「言葉」と「体験」です。
言葉はAIと共生するためにも重要です。正しい言葉をつかえなければ欲する答え、情報をAI は導き出してくれません。また、日本において言葉を「言霊」と言い換えるくらい言葉には命が宿っているという思想があり、傷つける言葉ばかり発していれば現象は良いわけがありません。人を思いやる、助け合う、思いあう言葉を子どもたちに実践として使用し、実生活の中で伝えていく、見せるべきです。子どもは親の背中、立ち居振る舞いを見て成長していきます。子どもの周りの大人たちの言葉がいわゆる悪いといわれる類であれば結果は想像に易いことでしょう。と考えると英語を学ぶことよりも、母国語＝日本語をしっかりと学ぶことが大切になってくると認識してください。

体験については生き抜く力にやり方を知っている、意味を知るということを子どもたちに伝えることが必要です。体験が感じる、気づく、知るという人間の感性を高める手段です。大人は親は多少リスクがあれども、子どもたちにどんどん体験をさせましょう。情活を教えるべき大人たちは現状、二次元論的思考に陥っています。これは世の中の負の情報に自分の意識を合わせるいわゆる「不安軸」を自分の軸としているから、自分の考えに合わない、自分のやり方に合わないのは悪、排除という歪んだ守りの思考に大多数が陥っています。情活の思考をそんな考えもある、いるという相手を受け入れ認める「球体思考」、これは「愛軸」です。人類は辿れば皆兄弟です。争いする思考はもう終わりにするべき、それが子どもたちの未来のためです。

そのために冒頭の元、日本の時代の元「縄文スピリッツ」を学び知ることが必要です。多様性を受け入れ一万年以上争いのなかった縄文の在り方を知り、これからは親、近所、学校、学童といった子どもを中心に大人がいる機関、集団が協力し合う「協育」をもとに協力社会、協力文化を作っていくべきです。
それは集団間の絆はもちろん、３世代間の絆も含まれてきます。子ども連盟と言ってもいいでしょう。未来のために子どもファーストで互いを思いやり、人を助けてわが身が助かる社会にするべきで、それを子どもたちに大人が実践の中で姿を見せることで誠の教育、子育てにつながると私は考えています。

（記録・編集：河地　清）

OPINION

熱血教師がいなくなる「働き方改革」は、愚策！

私は、某私立高校の教員を 35 年努めました。「熱血教師」でした。
わかる授業の研究、親切で面倒見の良い指導、個性能力を伸ばす教育を実践してきました。私立学校が世間で評価されるようになったのはまだまだ最近のことです。私学教育の優位性と言うことが半世紀も前から叫び続けられ、特色ある教育が多く現れるようになりました。私学には、情熱のある「熱血先生」「名物先生」が多くいます。昨今、世間では、教職は「ブラック企業」だと揶揄され魅力のない職業のように言われています。そもそも論でいえば、教師とは何か、何故教師になったのかが原点です。教職は限りなく「聖職者」だと思うからです。文科省の言う「働き方改革」は、「教員調整手当」を何%アップするとか、部活動を社会教育に委ねるとか、教員の働く環境を本質的によくするものとは必ずしも思えないものです。何故なら、教育指導に熱心な教員、強い使命感を持った教員から見れば「本質的問題からはずれた」程度の改革で、何ら根本的改革にはならないと思っているからです。返って、生徒のために全力を尽くす「熱血先生」の使命感、情熱の妨げになるものでしかありません。こうした「働き方改革」は、可もなく不可もなく過ごす所謂「サラリーマン教師」を増殖することにしかなりません。教育の現場から「熱血先生」が消えれば忽の内に教育の質は低下し、体よく言えば教育の均一化、平均化、標準化です。働き方の「平等化」です。従って、魅力も、特色もない、JIS 規格化した教育で覆われることになります。熱血先生、名物先生が多くいる学校教育からは、世の中で活躍する人物が多く排出していることは、歴史が証明しているところです。教育現場で、がむしゃらに部活動指導をした先生、寝食を忘れて生徒に接した経験を持つ先生であれば、手当が多い少ないではなく、やりがい、生き甲斐のある職業だと思える環境があることです。「聖職者か労働者か論争」が駈ってありました。今思えば不毛の論争でした。教師は、「聖職者」意識がなくては務まらない職業だと今でも思っています。私の奉職した私学創立者は、「親の気持ちになって教育せよ」でした。「親だったらどうするだろう」を前提とすれば、自ずと「熱血」「情熱的」「寝食を忘れ」て、行動するものです。であるが故に、教職は、社会的に高いステイタスに位置づけられなければなりません。そして、経済的にも、働く環境も最高の状態にすることが本質的「働き方改革」の条件ではないかと思っています。「熱血先生」を排除するような「教育改革」は愚策です。公立小学校の教育の実態に失望した元小学校教師、京　氏は、ならば自らの手で子ども達を育もうと NPO 法人放課後児童支援組織を立ち上げました。正に「熱血」指導の実践の場となっています。Passion(情熱)が充満する施設内へ今日も、「熱血先生」を慕って、卒業生が訪ねてくる光景を目にしました。（文責：河地　清）

かすがい市民活動情報ｻｲﾄ：http://kasugai.genki365.net/

ふるさと春日井学　検　索